

謝辞

連日の報道でご承知のとおり、新型コロナウイルス感染症の感染拡大から、多くの大学で卒業式を中止している中、本日、私たち卒業生のためにこのような方法で式典を挙行していただき、誠にありがとうございます。

ご多忙にもかかわらず、ZOOMにてご参加くださいました諸先生方、そして陰ながら支えて頂きましたご来賓の皆様にご心から御礼申し上げます。

さて、通信制大学で学ぶ私たちは、それぞれの生活と学業を両立し、ようやく今日の日を迎えることができました。

4年前まで私の最終学歴は中学校でした。

10代の頃、私はいわゆる非行少女で、まわりの同級生が受験勉強している中、学びからかけ離れた場所にいた私は、一生懸命非行の道を極め、真面目に暴走族の総長をしていました。

当時は何も考えず、いまが楽しければいいと思っていましたが、初めて社会に出たときに、学歴のない自分、知識のない自分が社会で生きていくことは大変なことだということに気がつきました。

しかし、そのころの私は、勉強をしなかった後悔よりも自分を認めてくれないことへの不満ばかりを言っていたと思います。結婚し、子どもを産んだ後もそれは変わらず、「子育てをしているし、自分の時間なんてない」などと、できない理由をまわりの環境のせいにして、自分から一歩を踏み出すことをせずにいました。

そんなとき、自分と同じように非行経験があっても、学び直しをし、大学に進んでいる人と出会いました。

衝撃でした。「勉強って何歳からでもしていいんだ」と。

この出会いをきっかけに、「無い物なら得ればいいんだ！」その方が私らしい。と思うようになり、その後、高校認定試験に挑戦し、ひとつ目標を達成するができた時、できない理由を探すより、できる方法を探すほうが簡単だということに気がつきました。

星槎大学には様々な年齢の人たちがいます。

自分の子どもと同じくらいの年齢の人との学びは、今までにない価値観を得ることができました。また自分の親と変わらない年齢の方々の学ぶ姿勢は、尊敬の念と「まだまだできるぞ」というやる気につながりました。

「スクーリング」「レポート」「科目修得試験」と、学びを進めていくと、私は社会生活を送る上で、たくさんの問いが出てくるようになりました。

その一つに、人は、社会的基準で「普通」だとか「当たり前」だと、評価をしますが、それは誰が決めた基準なんだろうという問いです。

その問いの答えを見出せないまま、学びを続けていたのですが、あるとき、スクーリング後、先生が私の問いを聞いてくれ、「常識を疑う」ということが大事だと教えてくれました。

社会学との出会いです。

自分の当たり前は、小さい世界だということを知り、大事なものは、人と人が認めあうことができる社会であることなのだ改めて気づかされました。

そして、認め合うことができる社会の第一歩は、生き辛さを抱えている人たちの現状を知り、一人ひとりが意識を変えていくことだということを知りました。

これまで「学業」「仕事」「子育て」と何足もの草鞋をはいての生活は正直、本当に、本当に、大変でしたが、過ぎてみると居眠りを我慢したスクーリングも、再提出となったレポートを夜な夜なやったことも、いい思い出となっています。

「やめてしまいたい」と心折れそうな時に応援してくれた子どもたち、スクーリング、レポート添削等を熱心にご指導いただきました先生方には感謝しています。

総合評価がSだった時は、涙がでるほど嬉しかったです。

感謝の気持ちは語り尽くせませんが、ここで学んだ大切なことを今後の仕事、活動に活かしていきたいと思っています。

そして最後に、私の活動の1つですが、昨年「人は変わる 社会は変えられる」をテーマに女子少年院に収容されていた少女をおったドキュメンタリー映画をつくりました。この映画の目的は、現代社会における闇を、知ることで意識を変えてもらう、そして、社会を変えていくためにつくりました。これからも、人と人が認めあうことができる社会のために、自分のできることを探しながら進んでいきたいと強く思っています。

最後となりましたが、学び舎であるこの星槎大学の益々の発展を祈念いたしまして、謝辞とさせていただきます。

令和2年 3月 14日

卒業生代表 共生科学部共生科学科 中村末子